
東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

Joint Planning Workshops and Events in the Community during the Time of COVID-19

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小室,明久, 竹,美咲, 笠原,広一, 細野,泰久, 筋野,友佳理, 武田,紗希, 下地,華菜恵, 真中,和恵, 芹澤,美咲, 今村,稀美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173491

コロナ時代の地域でのワークショップ・イベントの実践

小室　明久*1・竹　　美咲*2・笠原　広一*3・細野　泰久*4・筋野友佳理*5
武田　紗希*5・下地華菜恵*6・真中　和恵*2・芹澤　美咲*7・今村　稀美*7

美術・書道講座（美術科教育学分野）

（2021年8月30日受理）

KOMURO, A., TAKE, M., KASAHARA, K., HOSONO, Y., SUJINO, Y., TAKEDA, S., SHIMOJI, K., MANAKA, K., SERIZAWA, M. and IMAMURA, K.: Joint Planning Workshops and Events in the Community during the Time of COVID-19. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 73: 95-110. (2021)　ISSN 2434-9399

Abstract

This study is a report on the practice of community workshops and events, and a discussion of their potential. In the 2000s, children's art and cultural activities have been practiced and supported by various people such as artists, NPOs, and student volunteers based on the workshop method. However, with the worsening economic situation in Japan and the recent spread of the new coronavirus, it is necessary to reconsider the nature and significance of children's art and cultural activities under the new circumstances. Therefore, in this practice, we conducted a series of workshops jointly planned by university students, university faculty members, and members of society, and examined the significance of these activities.

In the first workshop, five programs were conducted: three-dimensional work with bamboo, lampshade making, collage, soap making, and brooch making. In the second workshop, we conducted an online workshop, and after an ice-breaker play, we made a photo book. As a result, all the activities provided children with an opportunity to immerse themselves in making art to their heart's content for the first time in a long time, despite the decrease in art activities for children during the pandemic.

The program was difficult to devise contents and methods that could be enjoyed while taking measures against infection, and there were plans for further improvement. Depending on the infection situation, it is necessary to flexibly prepare for both in-person and remote workshops, and to come up with contents and methods that can be safely enjoyed by more children and adult participants. In addition, how to provide support for workshop planning to those who are interested in such activities in these difficult times will be an issue for the future. In addition to in-person activities, online events are becoming more and more common, and we will continue to pursue ways of thinking about how to conduct activities in the community and how to manage them.

Keywords: Art Workshop, Online Workshop, Local Community, the Pandemic of COVID-19

＊1　中部学院大学 短期大学部 幼児教育学科（501-3938 岐阜県関市桐ケ丘2-1）
＊2　東京学芸大学 個人研究員
＊3　東京学芸大学 美術・書道講座 美術科教育学分野（184-8501　東京都小金井市貫井北町4-1-1）
＊4　武蔵野美術大学／東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科
＊5　女子美術大学 芸術学部アート・デザイン学科 ヒーリング表現領域（166-8538　東京都杉並区和田1-49-8）
＊6　東京学芸大学大学院 教育学研究科
＊7　東京学芸大学 教育学部 中等教育教員養成課程 美術専攻

Department of Fine Arts and Calligraphy (Art Education), Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要　旨

本研究は，コロナ禍の中，地域で開催するワークショップ･イベントの意義と可能性について考察したものである。2000年代に入り，子どもの芸術文化活動はワークショップの手法に基づき，芸術家やNPO，学生ボランティア等の様々な担い手によって実践され支えられてきた。しかし，国内の経済状況の悪化や昨今の新型コロナウィルスの感染拡大など，子どもの芸術文化活動は新たな状況の中でそのあり方や意義を再考していく必要がある。そこで本実践では大学生や大学教職員等によるワークショップの共同企画イベント「こくぶんじアートフェス」を実施し，こうした活動の意義を考察した。第一回目は，竹での立体工作，ランプシェード制作，コラージュ，石鹸づくり，ブローチづくりの5つのプログラムを実施した。第二回目はオンライン・ワークショップを行い，アイスブレイクの遊びの後で写真絵本づくりを行なった。その結果，コロナ禍で子どものアート活動が減っている中，どの活動も子どもたちにとって久しぶりに楽しく心ゆくまで制作に没頭できる機会となった。プログラムは感染症対策を講じながら楽しめる内容や方法を工夫して実施したが，さらなる改善の余地もある。感染状況に応じて対面とリモートでの実施を柔軟に準備し，参加者に安心して楽しんでもらえる内容と方法を考える必要がある。この困難な時代の中で，こうした活動に関心を持つ人々にどのようにワークショップ企画の支援を行なっていくかが今後の課題となる。対面で行う活動に加えて，オンライン・イベントも一般化しつつある現在，地域でどのような活動を行なっていくか，その考え方や運営方法などを今後も追求していきたい。

キーワード：アート・ワークショップ，オンライン・ワークショップ，地域コミュニティ，コロナ禍

1．はじめに

本論は東京都国分寺市の協力のもと進めている「こくぶんじアートラボ・プロジェクト」の一環として，大学教員，ワークショップに参加した学生や社会人らが一緒に企画を練って実施したワークショップ・イベントの取り組みを報告し，こうした活動が今日，とりわけコロナ禍の中でどのような意味を持つのか考察した。

地域の子どものための芸術文化活動を支える取り組みは，1970年代の児童館を中心とした取り組みから，1990年代以降は児童青少年センター，劇場，美術・博物館などへ拡張した。1990年代には美術・博物館を中心に様々なワークショップが行われるようになり，学校週5日制の導入の受け皿づくりと合わせて，参加体験型の芸術文化活動の取り組みが拡大した。こうした取り組みは子どもの文化的な生活を生きる権利拡充の道を発展的に切り開いてきた（佐藤・増山, 1995）。そして阪神淡路大震災を契機に1998年に特定非営利活動促進法が制定され，多くのアート系NPOが各地に誕生し子どもの芸術文化活動を担うようになった。こうした過程を振り返ると，子どもの芸術文化活動，子どものアート活動は，1990年代以降にワークショップとの出会いとNPOによる市民活動としての組織的な広がりなどを生み，日常生活の中に浸透していったと言える。

しかしこの間，バブル経済の崩壊，リーマンショックによる経済状況の悪化など，日本の経済状況が厳しくなると，子どもを取り巻く環境も厳しくなった。子どもの相対的貧困率も1990年代半ばから上昇傾向にあり，内閣府の「平成27年版 子ども・若者白書」によれば，相対的貧困率は2021年で16.3%とされ，就学援助を受ける児童・生徒の割合も15.6%と上昇が続いている。特に都市部での受験のための塾や習い事のための時間の増大や，SNSやオンラインゲームによる遊びの広がりといった生活環境の変化もあり，子どもが地域で参加できる機会や時間，芸術文化活動へのアクセスの機会は決して右肩上がりに豊かになってきたというわけではない。

さらに2019年末頃から新型コロナウィルスの感染が世界規模で拡大し始め，その後複数回の緊急事態宣言が発出され，学校も遠隔教育に切り替わった時期もあり，外出して人と交流するイベントの開催も激減した。同時にオンライン会議システムを活用したワークショップの広がりでは住む場所を超えて住む地域に縛られずに参加できる状況が一気に広がった。未だ感染拡大が収束する見通しは立たないが，たとえ収束してある程度は以前のような生活を取り戻すことがあったとしても，地域で行う活動に対する考え方や意味も今後は

変わってくることが予想される。

今回の「こくぶんじアートラボ･プロジェクト」（以下，本プロジェクト）は，こうした地域の芸術文化活動をめぐる状況変化の中で，子どもを軸としたアート活動が今後どのような形で展開していくことができるのか，その可能性を行政や市民と共に考えながら新たな活動を生み出していく取り組みとして，公益財団法人日本生命財団・2020年度児童少年の健全育成実践的研究助成「アートを基盤にした共創的な居場所づくり－アートを中心にした多世代交流・文化共創型の居場所づくりのモデル化－」としてスタートしたものである。

本プロジェクトでは，東京都国分寺市のJR国分寺駅に隣接する駅ビルにある国分寺市の公共スペースを拠点に毎月定例でワークショップを行い，子どもやアート，地域の居場所やまちづくり等について専門家や活動家の話を聞くフォーラムを開催したり，一緒にワークショップやイベントを企画運営するアートサポーターとワークショップ・イベントを企画する活動に取り組んでいる。プロジェクトはまだ途中段階だが，助成期間の前半期のまとめとして実施した「こくぶんじアートフェス」のワークショップ・イベントを振り返り，子どもとのワークショップに関心を寄せて参加した参加者たちとどのように企画を進め，ワークショップを実施したか，そこから見えてきた今後の可能性や取り組みの意味について考察していく。

2．開催までの経緯

本プロジェクトは東京都国分寺市の協力の下，東京学芸大学の学生を中心にプロジェクトをスタートさせた。学生によるワークショップを定期的に開催し，関心を持ったアート・サポーターの学生や社会人が少しずつ加わり，徐々にワークショップを実施する流れができていった。そして近隣の美術系大学である女子美術大学の野呂田理恵子准教授や武蔵野美術大学の細野泰久講師に参画していただき，大学の枠を超えて「こくぶんじアートフェス」（図1）をつくる取り組みを進めた。

ワークショップの実施にあたっては国分寺市の定める新型コロナウィルス感染拡大防止の対策や施設利用制限を踏まえて企画内容を検討した。準備段階の話し合いは全てオンラインで実施した。初めて一緒に活動するメンバー構成で，さらにはコロナ禍の中で様々な対策が必要であったこともあり，成果と同時に検討課題も多々出てきている。ウイルスの感染拡大の収束は未だその兆しが見えず，いずれまた以前のような生活に戻れるだろうと思う気持ちと，もしかしたらこうした生活がこの先も続くようになるのかもしれないという気持ちが共存している。実際にこくぶんじアートフェスのイベントは2021年の7月4日（日）と25日（日）を予定し，7月4日は実施できたものの，25日は緊急事態宣言発出と感染拡大の状況をふまえ対面での実施を中止し，急きょオンライン・ワークショップを代替的に実施している。コロナ禍の中でのイベント実施は，企画はするが実施時期の状況によっては中止や延期あるいはオンラインへの移行といった複数の選択肢が絶えずつきまとい，これまで以上に労力が必要となる。しかし，コロナ禍が始まって以降，子どもが参加できる地域の活動が減ってしまったため，こうした活動を非常に渇望し期待を寄せる保護者からの声もアンケートに寄せられている。状況を注意深く見ながら，どういった方法でこの状況下にあっても子どもの芸術文化活動への参加と体験を保障していけるか試行錯誤していく必要がある。このような困難が今回のこくぶんじアートフェス実施の背後にあることを述べつつ，ここからは実際にどのような話し合いによって企画が進み，実際にワークショップが実施され，そこで何が見えてきたのかを報告しつつ考察していく。

（笠原）



図1　こくぶんじアートフェスのフライヤー

3．企画について

3．1　企画のプロセス

本企画はこくぶんじアートラボのプロジェクトの一環として考案した。当初「こくぶんじアートフェス」は7月4日（日）と7月25日（日）の2日間の日程で企画していた。しかし，東京都では7月12日から4度目とな

る緊急事態宣言が発出され，7月4日のこくぶんじアートフェスは実施されたが，25日はオンラインでの代替プログラム開催となった。こくぶんじアートフェスでは5つのワークショップを用意した。ワークショップの題名，担当者，紹介文は下記のとおりである（表1）。

表１　５つのワークショップの内容

題名	担当者(所属)	紹介文
竹ひごで立体を作ろう	細野泰久（武蔵野美術大学非常勤講師）	竹ひごを使ってかんたんな立体を作ります。竹ひごはチューブにさしこんでつなぐので、低学年の方も簡単に作れます。中～高学年の方は、少し複雑な立体を作ってみましょう。
ちぎってはって！コラージュの世界	今村稀美（東京学芸大学学生）	お菓子の空き箱や折り紙、雑誌のページを自由にちぎって、貼って、好きな動物や生き物を作ってみよう！
きもちをこめた「プルプル石けん」作り	下地華菜恵（東京学芸大学大学院生）	手を洗う度に思い出す、自分だけの石けんを作ってみよう！自分だけの大切な気持ちを色と形に込めて、プルプル石けんを作ります。
夏の夜をもっと楽しく！ 和紙で作るランプシェード	筋野友佳理（女子美術大学ヒーリング表現領域助手） 武田紗希（女子美術大学ヒーリング表現領域非常勤助手）	和紙と割り箸で組み立てたシェードに、ペンやビーズでデコレーションをして、ステキなオリジナルランプシェードを制作します。
じぶん色の絵画ブローチを作ろう！	芹澤美咲（東京学芸大学学生）	おうちにある牛乳パックを使って、自分だけの色のまるで絵画のようなブローチを作ってみよう！

また，ワークショップを実施するにあたり，オンライン会議のアプリケーションZoomを用いて事前ミーティングを行った。事前ミーティングでは題材の試作を共有し，環境設定や実施場所に関する詳細な情報について共有した。

アートフェスの実施構想は5月から笠原・小室・竹の3人で話し合いを始めた。アートフェスを実施する契機となったのは，特にこくぶんじアートラボでの単独ワークショップが緊急事態宣言により延期したことである。昨年度からはじめたワークショップも定期的に行うことができ，地域の参加者にもリピーターが増えていった。活動でもスタッフ間で新型コロナウイルスの対策を講じつつ，運営も順調に進む中，再度の緊急事態宣言はプロジェクトを中断しかねないものであった。そのような中，活動を完全に休止してしまうのではなく，参加者が活動再開を楽しみに待つことができるように,緊急事態宣言が解除された7月にブース形式のワークショップ・イベントの開催を企画したのである。日程は7月4日（日）と7月25日（日）の2日とした。7月の開催には広報上の理由もある。緊急事態宣言明け直後に活動を実施する場合には，ポスター広報や広告などを緊急事態宣言中に送付しなければいけない。緊急事態宣言が延長する可能性や東京都の新型コロナウイルス感染者が日々増加していく中，広報活動は適切ではないと判断したため，7月での開催となった。

また，アートフェスを行うにあたり，これまでの活動とは異なるメンバーにも声をかけ，5つのブースを実施する運びとなった。ブースを担当している下地は5月にワークショップを行う予定であったが，緊急事態宣言により延期となってしまったため，アートフェスで実施することとした。

担当者が最終的に確定し，最初の打ち合わせは6月6日にオンラインにて行われた。打ち合わせでは実施者の自己紹介のほか，こくぶんじアートラボの概要説明に加え，新型コロナウイルスの対応について検討を行った。会場の上限人数の設定や新型コロナウイルス感染防止策の確認,実施場所の環境について話し合った。6日の段階ではそれぞれの大学から学生が学べるよう参加できる状況の確認も行われたが，7月の新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ，学生の参加は見送ったケースもあった。

2回目の打ち合わせは6月11日に行われた。この日は主にそれぞれの担当者が行う題材について確認した。それぞれが提案した題材について他のブースと内容が重ならないように配慮することや新型コロナウイルスの対応として密な距離での制作を避けることといった事項も確認した。実施時間も各20分以内とし，一つのブースに密集しないように計画した。6月中旬からフライヤーを送付予定のため，紹介文や題材名を決めて打ち合わせを終えた。6月22日に3回目の打ち合わせを行った。この打ち合わせが実施前最後である。当日の集合時間や流れ，ワークショップまでの注意事項につ

いて最終の確認を行った。

（小室）

３．２　企参画した人々の思いや交流から

アートサポーターは大学生から大学講師など年齢も経験も立場も異なる幅広いメンバーが集まった。アートサポーターの中には子どもを対象にしたワークショップの熟達者もいれば，自分が主軸となったワークショップが初めての人もおり，それぞれ異なる思いを持ちながら当日まで話し合いは進められた。

アートフェスの話し合いでは，それぞれのブースの企画を紹介し合う中で，さらに鑑賞の仕掛けをおもしろくする方法はないか，工程をなるべく最小限にして小さい子どもでも取り組みやすい方法はないか，参加者に応じて難易度を選べるような工夫など，話し合いを重ねながら企画の内容が磨き上がっていった。話し合いの合間には，今回のアートワークショップに取り組む根幹となる思いも語られた。

あるアートサポーターは，学生時代から子どもの居場所づくりに関心があり，実際に中高生を対象とした居場所づくりのNPOのボランティアやインターンとして活動した経験があった。居場所というテーマの裏には子どもたちの置かれる家庭環境や貧困といった社会的な背景への問題意識も語られた。これまでNPOでの活動では様々なイベントをチームで一緒に開催していたが，今回のアートフェスで初めて居場所というテーマとアートが合わさった試みに挑戦するという。ワークショップへ参加する子どもたちに対して，「その子の自己表現ができる場にしたい」という願いを軸に，子どもの思いに丁寧に寄り添うワークショップの企画がつくられていった。

アートラボのスタッフもアートサポーターそれぞれが持つ思いに触れることで，はっと気づかされることが多くあった。子どもの居場所の重要性を再認識し，またそもそも私たちの考える居場所とは何なのか，居場所というテーマに対してアートがどのようなことができるかといった問いを改めて考えさせられるきっかけとなった。アートサポーターの思いに触れることは，不安定な状況の中で私たちがアートフェスを実施する重要な支えとなった。

（竹）

４．こくぶんじアートフェスの内容（第1回目：7月4日（日）開催）

こうして7月4日（日）に初回のこくぶんじアートフェスを開催することになった。以下に当日の実施内容をブース毎に報告する。実施の日時と場所はいずれも，2021年7月4日（水）14：00～16：00，cocobunjiプラザ・Bホールである。

４．１．１　竹ひごで立体を作ろう

今回は，夏祭りの出店のようにワークショップを回遊するという全体の構成のため，手軽に取り組めるシンプルな題材とした。材料をあらかじめ必要な長さに切りそろえてあるため，道具を使わず素手で組むことができ，子どもも親も安心して取り組むことができる。

題材名：竹ひごで立体を作ろう
実践者：細野泰久
展　開：①導入　見本の提示
　　②材料の説明
　　③組み立て（実態に応じ展開図使用）
　　④毛糸の紐で首にかける（希望者）
材　料：竹ひご，シリコンチューブ，ストロー
道　具：立体展開図

４．１．２　実践の背景

この題材は，ヨコハマトリエンナーレ2017でのオラファー・エリアソンのプロジェクト《グリーンライト-アーティスティック・ワークショップ》での参与観察がもとになっている。グリーンライトは，アイスランドの数学者トルシュタインが考案した黄金比を用いた幾何形体のランプであり，それを参加者とともに作る。三角形断面の木材を再生プラスティックのジョイントでつなぐ構造を竹ひごとチューブのジョイントに置き換えた。

４．１．３　活動の展開

制作する立体は，パーツが少なく構造もわかりやすい正八面体と，少しパーツが多い立方八面体という難易度の異なる二種類の立体を用意した。手元にある見本や中空の見やすい位置に吊り下げてある作例を見ながら作る立体を選んでもらい，使う素材を説明する（図2）。形が比較的シンプルであるため，直感的に竹ひごを組んでも作ることができるが，低年齢であったり取り組める時間が短い場合は，パーツの構成と組み方がわかりやすい1/1の展開図を用い，その上に各パーツを並べる方法をとった（図3）。また，希望する子どもにはカラフルなストローを選んで竹ひごに差し込んだり，多色の糸が撚り合わせられた毛糸で立体をぶらさげるなど，色彩でも楽しめるようにしている（図4）。

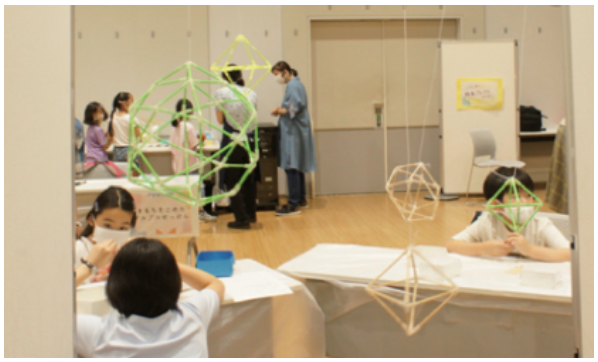


図２　吊るして展示した作例



図３　上にのせて作る展開図を用いる



図４ カラーストローや毛糸を用いカラフルにする

４．１．４　考察

正多面体や半正多面体はシンメトリーな美しさをもつ。ジョイント部分が可動する立体はあまりないが，立方八面体は形を変形させてその変化を楽しむことができる。また，この題材は竹ひごの長さを変えたり，ジョイントを工夫することにより，多様な展開が可能である。子どもは一般に「9（10）歳の壁」を越えると抽象的なものへの興味が湧く。外界の探索を全身の感覚でおこなってきた子どもは，生活世界を構成する基本的な形体である幾何学的なものへの興味が強く出てくる時期でもある。ワークショップでは，題材にきれいさやかわいさが求められることが多いが，それらとは質の異なる思考の体験を促すことができる。

（細野）

４．２．１　夏の夜をもっと楽しく！和紙で作るランプシェード

題材名：夏の夜をもっと楽しく！和紙で作るランプシェード
実践者：筋野友佳理，武田紗希
補　助：井口沙良
記　録：筋野友佳理
展　開：①導入，制作工程説明
　　②ランプシェード制作
　　③鑑賞
材　料：和紙（障子紙），割り箸，水性ペン，
　　クレパス，スパンコール，折り紙，
　　ボンド，のり，はさみ，花型パレット，
　　グルーガン，布巾
道　具：アクリル絵具で黒く塗装された段ボール
　　2箱（作品鑑賞用），暗幕，LEDキャンドルライト



図５　開始前のセッティング済みの状態（感染対策のため道具は１人１セット用意）

４．２．２　実践の背景

新型コロナウイルス感染症の拡大により，オンライン授業やリモートワーク，外出自粛の要請などの影響でおうち時間が増えている。子どもたちも普段なら外出して様々な体験ができる長期休みも外出自粛要請で遊びの種類が制限され，コロナ禍での子どもたちのおうち時間はYouTubeやゲームをする時間が多く，デジタル機器が常に側にある状態である。そのような現状を踏まえ今回のワークショップでは，おうちで過ごす時間が長い夏休みの夜に少しでもデジタル機器から離れ，自分の作品の鑑賞を促しやすい題材を実施した。また，自宅にある身近な材料を使い簡単な工程で制作し，工作を楽しみながらものづくりにチャレンジできることの体験を目的とした。



図６　絵を描いた和紙にスパンコールを貼る

４．２．３　活動の展開

幼児から小学生が参加対象のため，ランプシェード制作の工程を参加者に合わせ制作した。幼児の場合は和紙に割り箸の骨組み付きのものを一人一つ配布し，児童（3年生以上の希望者）の場合はランプシェードの骨組みから作成した。

和紙（175mm×340mm）と割り箸3本，1/2カットサイズ6本を一人1セット配布。和紙を横向きに置き，ザラザラの面に割り箸をボンドで貼り合わせ，骨組みを作る。シェードの骨組みが完成したら，クレパス・水性ペンを使い絵や模様を描く。次に別のテーブルに並べられた，様々な形をしたスパンコールや三角四角にカットされた折り紙を花鉢パレットをお皿に自分の描いた絵にどんなものが合うかイメージを膨らませ選びに行く。選んだ素材は絵の描いた和紙の上で並べ，のりやボンドを使い飾りつける。仕上げにグルーガンで貼り合わせてランプシェードの完成。最後に暗幕の被っている黒いボックスに入れ，シェードの中に7色に光るLEDキャンドルライトを灯し鑑賞。しばらくして実践者も完成した作品を一緒に鑑賞し，完成した作品について振り返りをする。「おうちでも部屋を暗くして，色んなライトでどんな風に絵が見えるか試してみてね」と投げかけ，おうちでの楽しみ方を紹介するなどした。

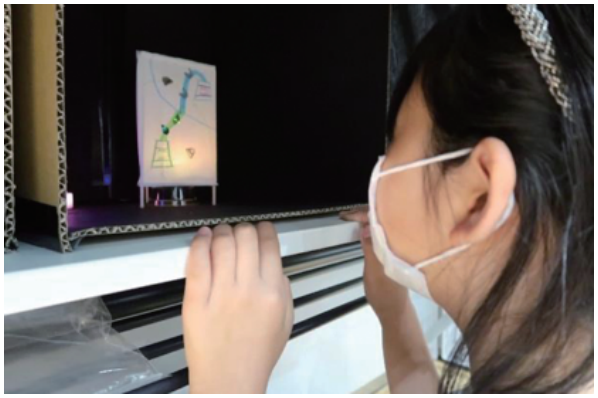


図７　完成したランプシェードを鑑賞する様子

４．２．４　考察

当初は制作するテーブルに全ての材料を並べ，絵を描く工程と飾りつけを同時に行い，ランプシェードの完成，最後にその場で鑑賞としてワークショップの終了を予定していた。だが，ワークショップ実践スペースや貸出し机のサイズ・台数などの使用条件から制作工程を細かく分けることにした。鑑賞ではランプシェード本来の使い方に近い環境をつくり，明るい中ではなく暗い中での鑑賞をできるように変更した。

上記のように各工程でブースを設けたことにより，参加者は制作途中で迷いが生じた際，工程ごとの素材を見に行ったり，素材を試すなどしてアイディアを膨らませていた。また，工程を細かく分けたことで段階を踏んで制作している作品と向き合うことができ，作品へのこだわりポイントが増えていたように感じた。最後に暗い空間で明かりのついたランプシェードを交互に鑑賞した。これは，おうちに持ち帰った後の作品の楽しみ方を広げる機会ともなった。

（筋野・武田）

４．３．１　きもちを込めたプルプル石けん作り

本題材は自分の中にある大切にしたい気持ちと向き合い，色や中に入れるきもちのかけらを選び取り，きもちを込めた石けんを作る活動である。

題材名：きもちを込めたプルプル石けん作り
実践者：下地華菜恵
補　助：真中和恵
記　録：下地華菜恵
展　開：①大切にしたいきもちを絵や文字で表す
　　②きもちのもとを選ぶ
　　③きもちのかけらを選ぶ
　　④ゼラチン石けんを流し込み完成
材　料：ゼラチン，カップ，ビニール袋，
　　雑巾，食紅，スプーン，ドライフラワー，
　　油性マジック，保温プレート，モール

４．３．２　実践の背景

本実践は新型コロナウイルス流行により，手を洗う頻度が増したことを受け，使う度に自分の大切にしたい気持ちが思い起こせるようにとの願いを込めた題材である。コロナウイルス感染拡大によって，世の中が大きく変わっていくが，自分の中にある大切にしたい

ことやそれを想う気持ちは不変であること，変化の大きい社会の中でも，これらが生きていく上で支えになると思い企画した。

４．３．３　活動の展開

導入では対話形式で自分の中にある大切にしたい気持ちを考え，石けんを入れるビニール袋に油性ペンを使い，絵や文字で描いていく（図8）。その後，数種類の色水の中から自分の気持ちに合った色を選び，その後“きもちのかけら”（ゼラチンで固めた色水，ドライフラワー）を選び，自分だけのオリジナル石けんを制作する（図9）。対話ベースで子どもたちのそれぞれの大切にしたい気持ちに寄り添いながら活動を展開した。



図８　大切にしたい気持ちを考えている場面



図９ きもちのもとかけらを選びとっている場面

４．３．４　考察

本来この企画は2時間計画であった。緊急事態宣言を受けて活動時間が1回15分，複数ワークショップの同時開催となり，当初よりも大幅な変更を余儀なくされた。ゼラチンで固められたカラフルな色水との出会い，感触を楽しむなどの活動が制限された。その中でも大切にしたい気持ちを振り返る時間に重点を置き，対話形式で一人ひとり聞いていくと，それぞれの好きなこと，大切にしたいきもちを振り返ることできた。「恐竜が好きだからそのときのワクワクしたきもち」，「朝，学校行く時お母さんが見送りしてくれるときのきもち」，「美味しいものを食べる時のきもち」などの気持ちが子ども達から挙げられた。石けんの色や中に入れる素材を選ぶ際に自分の大切にしたい気持ちと色や形の関係性を自分で意味づける様子も見られた。

子ども一人ひとりが大切にしたいきもちは多種多様であり，完成したカラフルな石けんには色や形にそれぞれのきもちが込められていることがわかる（図10）。

（下地）



図10　完成したプルプル石けん

４．４．１　じぶん色の絵画ブローチを作ろう

「身近な牛乳パックという素材を使ってペンと親しみ，じぶんだけの色の，まるで絵画のようなブローチを作ってみよう！」。この題材は牛乳パックを用いることで身近な素材の可能性に気付いたり，ひとつの画面に含まれる色彩や線画の魅力に触れたりすることを目的とする。また，服飾品として残すことで，生活とともにあるという工芸的価値を見出すきっかけとなることを目指す。

題材名：じぶん色の絵画ブローチを作ろう
実践者：芹澤美咲
補　助：亀井つき葉
記　録：芹澤美咲
展　開：①導入
　　②ブローチ制作－絵を描く
　　③ブローチ制作－トリミング
　　④ブローチ制作－ラミネート・接着
材　料：牛乳パック，ペン，クレヨン，
　　ブローチ台，ラミネートフィルム
道　具：はさみ，両面テープ，ラミネーター

４．４．２　実践の背景

コロナ禍でワークショップの開催延期や中止が相次ぐ中，定員を減らし，大会場でブースごとに開催することとなった。そのひとつとしての開催で，人数に偏りや個別進行の難しさ等に不安があったものの，偏ることもなくスムーズに行うことができたと感じている。年齢も幅があったが，それぞれ主題を見つけ素敵なブローチが完成し，身につけて帰っていく子もいた（図11，12）。



図11　作品制作の様子



図12　作ったブローチの完成写真

４．４．３　活動の展開

展開①で大まかな工程を説明し，画材を選択してもらうと②すぐに牛乳パックに絵を描き始める子が多かった。③ラミネートの前のトリミングで大きな絵を描き一部を切りとる子もいれば，小さな絵をそのまま切りとる子もいた。牛乳パックの重なりの部分などは，かなり厚みがあり切るときに苦労している様子が見られた。④安全のためラミネーターには私が通したが，フィルム状でより硬くなった牛乳パックを見て感動している様子が見られ，ラミネートの仕組みに興味を持つ子もいた。ブローチ台を両面テープで接着してもらうと実用感が増し，すぐに身につける子どもの姿も見られた。



図13　完成した作品を身に付けている

４．４．４　考察

はじめこの題材ではペンではなく絵の具を用いて制作する予定で，絵の具と遊び混ぜるなどの効果による偶発的，抽象的な画面を生み出してから好きな一部をトリミングするということを想定していた。しかし，会場により画材が制限されたことで，画材による表現活動過程の違いを感じることができた。筆や手に比べてペンは細く混色も難しいが，線の描写や原色のよさがある。それらを子どもたちは無意識に適用し，細かな表現や具体的な主題が多く描かれたのだと考えた。そのため，目的に沿った画材の選択，段階を追った進行の仕方の重要性を改めて感じた。

（芹澤）

４．５．１　ちぎってはって！コラージュの世界

ご当地雑誌や衣服のカタログ，美術館の広告やお菓子の空き箱などを利用して，無地のポストカードに30分程度でコラージュを行う。説明の際には適切なハサミの使い方（人には向けない，手の位置に気をつける，紙の方を回して切るなど）を指導し，作品例や切り抜いてあるパーツを提示しながら「一番好きな生き物は何かな？」「この中だったらどのパーツ/色でネコちゃん作れそう？」といった声かけを行い，自分自身の作品における工夫や完成形のイメージを誘う言葉を掛け，制作活動に入ってもらった（図14）。

題材名：ちぎってはって！コラージュの世界
実践者：今村稀美
記　録：今村稀美
展　開：①説明
　　②各自制作
材　料：ポストカード，空き箱，広告
　　折り紙，ポスカ，のり，はさみ



図14　制作の様子

４．５．２　実践の背景

コロナの影響で長時間大人数が同時に作業することが憚られる中，幼児から小学生の子どもたちと保護者の方を相手に30分程度で作品が完成できるワークショップを行うという初の試みであった。自主的にワークショップを考案して実践するのは初の試みであったため，「子どもに対するサポートのしやすさ」や「短時間で実践できる内容」という面などから考えて悩んだが，大学の授業で行っていた材料を切って貼って平面上に構成する「コラージュ」という単純ながらも切り貼りした一枚のパーツから様々な想像に発展しやすい表現技法を用いることで，子どもたちの個性的な想像力を見ることができるのではないかという理由から，コラージュ技法を使ったワークショップを考案するに至った。

４．５．３　活動の展開

ティッシュの箱の模様をパーツとして切り取ってあったものから亀の甲羅を連想し，海で泳ぐ亀を表現した子もいれば，パーツからではなく色から着想を得たのか，美術館の黒い広告一枚のみを使って恐竜を表現した子や，ひたすら小さいキャラクターを探して切り抜き画面上に自由に配置する子など様々なスタイルのコラージュ作品が見られた（図15，16）。

子どもたちには予め二枚のポストカードを渡していたため，１枚目を作っている時に自ら発見した工夫を２枚目の制作で実践してみる子や，2枚のポストカードを繋げて使う子もいた。また，拘りがあるのか30分で終わらない子も多く，近くにいた保護者の方から子どもの集中力に対して驚きの言葉をいただく事もあった。こちらから声かけなどのサポートを行うことはアイデア出しと工夫点を見つけて言ってあげること以外にあまり無かったため，制作は子どもの主体的な活動となり，子どもの発想力の強さと集中して実践する様子を強く感じることができた。

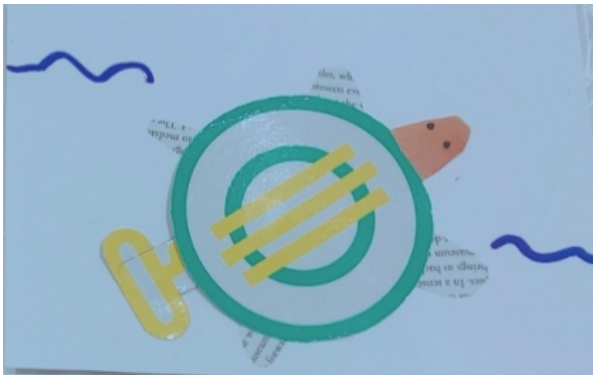


図15　コラージュ作品の亀



図16　コラージュ作品の恐竜

４．５．４．考察

今回初めてワークショップにスタッフとして参加して，他のスタッフからのアドバイスや子どもたちの表現や発想，子どもたちとのコミュニケーションから私自身に多くの発見があった。

まず，このワークショップが始まる前に模様を先に切り取ってパーツとして使ってもらうことで，子どもたちが最初にアイデアを出す時に悩みすぎないようにしたら良いのではという経験者の方からのアドバイスと材料提供のお陰で，自分にとってスムーズな指導を行うことができ，子どもたちも制作における自らのイメージを広げて活動にあたることができたと感じる。そのため，このように短時間でかつ子どもの主体性が中心となって行われるワークショップを行う際は，アイデア出しや完成形のイメージにつながるヒントになる物事を準備しておくことが重要であるという点に気づくことができた。

次に子どもたちとコミュニケーションを取っていて分かったことだが，ポストカードを手紙として渡すためにメッセージを書いている子には「もらったら絶対喜ぶよ」などと声をかけることや，積極的に「かわい

いね，ここはどうしてこのパーツを使ったのかな？」「これはどういう場面？」など工夫点を褒めたりイメージに対する質問をすると，考えていなかった着眼点や発想を子どもが話してくれるため，子どものモチベーション向上にもつながると考えた。次回もこのようなワークショップを行う際は，コミュニケーションや指導などのサポートを増やせるようにするため，スタッフを増員しようと思った。

最後に，この題材を行うことで子どもたちが各々のイメージを形にしていく造形手段（コラージュ技法）を知ること，技能に関しては素材を自分なりに活用して表現することなどの学びに繋がり，周りの子や自分の作品を見てそのよさを感じ，自らの価値観を深めるきっかけになったら良いと感じた。

（今村）

５．実施後の振り返りから

ワークショップ実施後の振り返りでは次のような感想や意見がでた。

井口：ワークショップで子どもが喜ぶ姿を間近で見るのが初めてだった。一面に描く子とマスごとに描く子もいて発想の違いがいろいろあった。
武田：子どもとかかわって，想像力のすごさや，その歳でしか出せないものに間近で触れることができた。同じ目線でストーリーを聞かせてもらった。
筋野：打ち合わせのとき，黒いボックスに入れて見せてみたらという提案があり，やってみたらとてもよかった。滞在時間が長かったのでアイディアがでるような声掛けも次回はしたい。
下地：みんなに助けてもらってできた。気持ちを込めたプルプル石鹸にはどのように気持ちが入ったのかなど聞いていたら，こちらの気持ちもあったかくなった。
今村：子どもならではの発想がすごかった。ただの丸い形に図形が描いてあったものを亀の甲羅にしたり，果物の写真を目にしてピンクの犬にしたり発想がすごかった。
真中：気持ちやストーリーをビニールに描いたり，お母さんにも声をかけて入っていただいたりするのがいいなと感じた。また，私が手伝えるようにわかるように示していただいた。とてもいい時間を過ごした。
芹澤：子どもたちは大きなものを描いていた。思っていた以上のものが見られた。バタバタしていたが，完成した瞬間やブローチ台をつけたりなどして楽しんでいた。
細野：子どもたちはすごく集中していて，考えながら立体をつくる体験に興味を持ってもらえた。なかには2回目参加する子どももいた。
竹：今回リオンホールで行うのが初めてだった。5，6回参加している子どもや保護者も来ていた。ホールのスタッフも「とても子どもたちが楽しそうにしていましたね」と声をかけてくれた。

感想から見えてくるのは，第一に，実際に子どもが何かをつくったり，表現することに没頭する姿に触れたことの印象が多く語られていることだ。子どもの目線でストーリーを聞いたり，自分の目の前でどんどんイメージを生み出して形にしていく姿への驚きの声が複数上がっている。また，それぞれがこれまでの経験や関心などからワークショップを構想しており，それを実際に活動に展開した時にどのようになるものなのか，それを実際に目の前で楽しんでいる子どもの姿として見ることができたことは大きな喜びであり自信にもなっている。特に学生は実際に子どもに関わってみたことで，そうした実感をより強く感じているようである。また，ワークショップに取り組むスタッフのさりげない気配りに気づいた実践者目線，会場のホール・スタッフの方や保護者などの反応を感じ取りながら活動が楽しいひとときになることを意識して取り組んでいたことなども見えてきた。

一方で，つくりだすと集中して時間もかかることから，一つのワークショップで思った以上に時間をかけて楽しむ子もおり，5つのワークショップの人の流れが滞留しないように注意する必要があった。また，複数のワークショップを廻ることは参加する楽しさは大きいが，マスク着用で参加し，参加者の入れ替え時にはテーブルや道具を消毒しながら取り組んだが，複数の人が順番にブースを廻る仕組みはコロナ禍の中ではより工夫した方法や別のやり方を検討する必要があるだろう。コロナ禍の中で子どもも大人もスタッフも久しぶりに活動を共にする体験をもてたことには大きな意味がある。他方，これまでのようなワークショップ体験の良さや方法を全く同じようには盛り込めないこともあり注意や工夫が必要である。収束の兆しが見えないコロナ禍の中で，どのように地域で子どもの芸術文化活動を展開していけるのか，様々な試行錯誤を重ねていく必要があるだろう。

コロナ禍で子どもが参加できる地域のイベントが少なくなっている中，多くの保護者がこうした活動があることを評価してくれていることは確かであり，その取り組みのあり方については引き続き注意深く検討を

重ねていくことになるだろう。

（笠原）

６．オンライン・ワークショップ ー写真絵本づくり！（第２回目：７月25日（日）開催）

６．１　実践の概要

本事業開始時に新型コロナウィルスの感染拡大が始まり，以前のようには先を見通せない中での開始となった。ここまで2回ほど緊急事態宣言の発出により活動が延期となった。今回は3回目の発出に伴い，7月25日に予定していた「こくぶんじアート・フェス」が延期となったことから，オンライン・ワークショップを企画し実施した。

題材名：写真絵本づくり！
日　時：2021年7月25日（日）10：00～12：00
場　所：オンライン開催
実践者：笠原広一・真中和恵・小室明久・竹美咲
参加者：子ども2名（小1・小3），保護者2名
展　開：①リズムに合わせて自己紹介
　　②写真絵本づくり
　　③感想
材　料：折り紙
道　具：スマートフォン

６．２　実践の背景

今回は遠隔会議システムのZoomを使ったオンライン・ワークショップで，参加者にはZoomの基本的スキルが求められることや，直接つくる活動をサポートすることが難しいため，小規模の活動とし，折り紙を使用するなど，各家庭で準備しやすい条件で行うことにした。折り紙でつくった生き物でお話をつくり，スマートフォンで場面ごとの写真を撮影し，それを順番に並べてオンライン上で紹介する写真絵本づくりである。オンラインのため，参加者の様子やどのように楽しみながら参加できているかをつかむことが難しいため，アイスブレイクでの雰囲気づくりなどを丁寧に行いながら，画面越しでも互いに楽しみながらつくり交流できる内容とした。

６．３　活動展開の概略

当日の展開としては，まず本日の趣旨や流れについて説明があり（担当：小室），次にアイスブレイクとして「リズムに合わせて自己紹介」（担当：真中）を行った。参加者同士打ち解けてもらい，アイディアを出したり，オンラインで何かを紹介しあうことが行いやすくなる雰囲気づくりを進めた。次に写真絵本づくりにつながるような関連性を持たせた絵本の読み聞かせを行った。そして写真絵本づくりに移行し（担当：笠原），作例の「たこくんのごはん」を紹介し，活動のイメージを伝えた。最初に折り紙でつくりたい生き物を折り，次にそれを用いて各親子が家の中でストーリーをつくり，それをスマートフォンのカメラで順番に撮影してお話をつくっていった。できた写真はメールに添付して事務局に送り，スタッフが写真の順番を整理してZoomの画面共有機能によってスライドショー形式で発表する準備を進めた。その間に参加者親子は手元の写真でお話を発表する（語る）練習を何度か行った。

準備ができたところでスタッフ（担当：竹）がまず発表し，次に二組の親子が発表した。スタッフの発表では，折り紙でつくったヤドカリが自分が入るための家を探す物語とし，家の中にあるグラスや掃除機などを使い，最後に本物の貝殻に出会うお話である。親子Aの作品はペンギンが旅する物語で，最後に家にあったドラゴンの背中に乗せて元いた北極に戻るストーリーである（図17）。親子Bは鶴やセミやクワガタに加え画用紙等で街をつくり（図18），実際に皿に食べ物を並べたり，家にあるものをフル活用したお話をつくった。発表後に全員に感想を話してもらい終了となった。

（笠原）



図17　親子Aのペンギン



図18　親子Bがつくった街

６．４　オンライン・ワークショップを実施して

本プロジェクトのZoomでのワークショップ開催は初めてだったため，入念な打ち合わせから始まった。趣旨は「アートと居場所」。普段なら子ども達がいつでも手を差し伸べられる位置にいて，声を掛け，一緒に制作を楽しむことが可能であるが，今回はオンラインのため，心をほぐし，楽しく制作意欲に繋がるにはどうしたらよいかを考えた。まずは自己紹介を兼ねてリズム遊びを取り入れた。お題は「好きな食べ物」「好きな生き物」を保護者の方も交えてリレー形式で答えてもらった。「スイカ」「アイス」「ヨーグルト」等，夏ならではのものが多く，同じ答えが出ると笑顔がこぼれ，そこから共感が生まれた。「好きな生き物」は次の活動へのヒントになるのではと思ったところ，ある男児が「ペンギン」と答え，実際の制作の中でも「ペンギン」が登場したので有効な導入であったと思った。

次にお話の世界へ誘う方法として絵本の読み聞かせを行った。折り紙制作へスムーズに移行できるよう事前に他のスタッフ（竹）に折り紙で作ったシロクマを準備してもらい，自己紹介してもらった後，そちら（竹）の画面からこちら（真中）の画面へワープしたような仕掛けを行い，『しろくまのパンツ』（tepera tepera・ブロンズ新社）の読み聞かせを行った。しろくまが自分のパンツを友達と探す物語だが，画面越しにも親子の笑顔がとても印象的だった。

その後，笠原が折り紙でつくった「たこくんのごはん」の物語を見て，笑ったりうなずいたりしている親子たち。今日の活動内容を楽しく把握したところで，いよいよ制作活動が始まった。40分ほどの時間で，主人公となるキャラクターを折り紙で折り，保護者と一緒に「どこで写真撮る？」「ここにしよう！」など，画面越しから聞こえる声が弾んでいた。普段なら制作過程を私達が一緒に楽しみ保護者は横で見守る場面であるが，今回は親子で折り紙制作，写真撮影，最後に物語をつくるところまで取り組んでもらい，その工程を画面越しに見させてもらう貴重な機会となった。

参加者は1年生と3年生だったが，それぞれに家の中にある場所や物をうまく利用してスケールの大きな物語を完成させていた。発表も子ども自身のナレーションだったため，それぞれ個性的な絵本発表となり優しい気持ちにさせられた。

最後の保護者や子ども達の感想では，オンラインであったが普段と同様に楽しめたことや，画面越しであってもいい時間を過ごせたという感想が寄せられた。

今回のオンライン・ワークショップでは画面をOFFにすることで互いの活動が見えないため，オリジナルの作品や内容になっていたことが大変良く，自宅ということで工夫の自由さと発展性があることに気付いた。そしてキャラクターも折り紙を使うことで，描くことを苦手とする子どもがいても制作に取り組みやすいメリットを感じた。リモートでのワークショップでは画面でお互いの顔（表情）を見たり話したりしながら作品の制作過程から作品鑑賞まで共有することができるのが最大の良さであると思った。

（真中）

始める前は対面以上の緊張があったが，アイスブレイクによりほぐれた状態で活動を始めることができた。オンラインでは対面以上に「今は○○さんの参加者の絵本をみる時間だ」とその瞬間に集中し，一つ一つの活動の濃度が高く感じられた。鑑賞でそれぞれの絵本が物語られると，みな集中して聴き入るため，話し手は語り甲斐があったように思う。制作過程はそれぞれ画面外で行う活動も多かったため，互いに顔を見合わせるのはアイスブレイクと作品鑑賞の時間が主だった。お互いに顔を見合わせる時間が短かったにも関わらず，個々の発する一言がしっかりと受け取られることで，「人と一緒に活動をした」というワークショップならではの繋がりの充実感があったのではないかと思う。対面で制作中に隣り合った人とゆるやかに関わりを持つようなワークショップと質の異なる試みとしておもしろさを感じた。

つくられた絵本にはレゴの人形を使い，人々が行き交うような街をつくって，ひとつのシーンを丁寧に作り込んだり，家の冷蔵庫から取り出したスイカを登場させ，皆の喉を鳴らさせる風流なシーンがあったり，短い制作時間に壮大な旅の物語が生み出されたり，味わい深い作品がつくられた。参加者の豊かな物語にふれ，心がほっこりするようなあたたかい時間を過ごした。

（竹）

６．５　考察

本事業では初の試みであるオンラインワークショップは小規模ながらもオンラインの特性と結びつけて実施することができた。題材の写真絵本では物語を考え，登場人物を折り紙で作り，場面を構成し，写真を撮影する一連の流れがある。オンラインワークショップでは描くことや作ることといった場合，自宅にある材料に限られてしまう。今回は折り紙のみを共通の材料として扱い，物語に登場する他の物や場面に必要な道具は自宅にある材料を工夫して用いることとなる。家にあるスイカや竜のおもちゃ，お皿にお菓子といった

様々なものがブリコラージュな要素を取り入れつつ，物語を彩る場面へと変わり，親子で物語を制作することができた。

（小室）

7．ワークショップの振り返り

7．1　参加者のアンケートから

7月4日に開催したこくぶんじアートフェスには保護者含めて38名（15家族）が参加者した。内訳は下記のとおりである（表2）。

表2　参加者の内訳

年齢	学年	人数
10	5年	1
10	4年	2
9	3年	3
8	3年	1
8	2年	1
7	2年	3
7	1年	2
6	1年	3
5	年長	1
4	年少	1
2	未就園児	2
計	子ども	20
計	保護者	18

アンケートは保護者に記入してもらい，17枚（15家族）から回収した。アンケートでは年代から所属の他，今回の企画の情報入手先，こくぶんじアートサポーターの募集について記入してもらった。以下がアンケートに記入された感想である。

Q：今回の活動はいかがでしたか？

よかった　　・・・17名

ふつう　　・・・0名

よくなかった・・・0名

理由

・少人数，子どもが楽しんで参加していた

・子どもの集中する姿がみられとてもよい機会だった。教えてくれる方々との交流もとてもよいと思った。

・このようなイベントが少なくなるなか子供たちのよろこぶ活動を開催していただきありがとうございました

・こどもの創造力をアートに表現することができるとてもよい機会

・日頃体験できない事を丁寧に教えて頂けたからたくさんショップがあって楽しめました

・家庭では作らない工作ができた。

・多くの種類があり，子も自ら選ぶ楽しみがありました

・子供がとても興味を持って取り組んでいた。

・少人数で安心して参加できました。

・子供がとても楽しんでいた。

・子供が夢中になる姿を見られて嬉しかったです。

Q：その他，こくぶんじアートラボの活動について感想やご意見等ございましたらお願いします。

・子供参加のワークショップはなかなか検索してもなく，芸大の先生や学生さんの丁寧で子供によりそった関わりをしながら参加できる機会をまたつくっていただけたらと願います。

・アートが大好きな子供だったのですてきな1日になりました。ありがとうございました。

・子供が夢中になって工作していました。企画ありがとうございました

・すてきなラボありがとうございました

・すばらしい活動だと思います。また参加させて頂きたいです。

・ありがとうございました。娘もはじめはぐずっていましたが，作ることが楽しいようで全てのショップをまわることができました。コロナがおちついたら，作り，関わり，創造できるようなワークショップの広がりを期待します

・1つのテーマを追求するのも楽しいが，何種類も体験できて楽しかったです！！

・楽しかったです，子供もよろこんでいます。

・楽しかったです。また，参加させて頂ければと思います。

・とても良い活動だと思います。また参加したいです。サポートしてくださる方達もやさしく，子供達もとてもよろこんでいました。

・またぜひ参加させて下さい。よろしくお願い致します。

印象的なのは「子供が夢中になって工作していました」のように，子どもが好きなことに没頭して取り組む姿に触れたコメントが複数あることである。そして「このようなイベントが少なくなるなか子供たちのよろこぶ活動を開催していただきありがとうございました」とあるように，コロナ禍で様々な子どものためのイベントが中止され，生活にも様々な制限がある中で思う存分に作ることを楽しむ機会があることは今まで以上に意味のあることだといえる。こうした状況があとどれくらい続くのかは予測ができないが，感染拡大の状況を絶えず見ながら，感染防止のための対策をとりつつ，可能なところで少しずつこうした機会をつくっていく必要がある。

（小室・笠原）

8．総合考察

本論文で実施したワークショップは地域の住民である親子を対象に活動が行われている。昨今，様々な教育機関や団体，コミュニティがワークショップを実施している。さらに，アートを軸にした活動も学校教育だけではなく，社会に開かれている教育として地域に根差して実践されている。また，ワークショップとしての活動が増えたことによって学校教育だけではない職種間の人による連携が増えている。

吉澤は美術教育における専門職の協同の可能性に着目し連携の方法を提案している（吉澤，2020）。吉澤は専門職の協同連携における課題の中で，当事者の「必要感」の意識の差異により，実施状況が異なることを述べている。また，実施する中で連携における地域間格差や学校間での格差は当事者にとって「必要感」を超えてしまうことで負担に感じるという（吉澤，2020）。地域での大学教員や学生，また，住民にとって活動を通して持続的に実施していく中で，当事者の「必要感」を高めていくことが重要な要件といえるだろう。

このコロナ禍において連携は形を変えて実施されている。本活動では大学間での打ち合わせはオンラインによるアプリケーションを用いて行い，協議を重ねていった。また，緊急事態宣言に伴い，ワークショップが延期になったと同時にオンライン・ワークショップを企画した。これまでは顔を映し，互いに画面上でコミュニケーションを取るワークショップは少なかった。なぜなら，美術教育が行なってきた実践は描くことや作ることといった造形行為を主とする活動であるからだ。しかし，世の中の状況が刻一刻と変化していく中，顔を映したオンラインでのミーティングやワークショップも多く実施されている。

今回のオンラインワークショップでは学生・教員による大学間の連携アプローチの形として新たな契機となった。新型コロナウイルスの流行によって地域でのアート・ワークショップや美術教育での実践活動も新たな方法や計画の仕方を模索していく必要がある。ワークショップの実施にのみ焦点を当てるのではなく，考案から計画までの具体的な支援案や取り組みを提示することでコロナ禍におけるワークショップの一助になり得るのではないだろうか。

（小室）

9．まとめ

ここまで地域の状況が変化する中で子どもの芸術文化活動を支えるこれからの取り組みのあり方について実践を通して検討してきた。さらに，新型コロナウィルスの感染拡大が始まり，こうした取り組みをどのように具体化し継続していくことができるのか，今まで以上に難しい状況の中での実践研究となった。数週間後の見通しが立たない中で，告知の直前まで状況の推移を見ながら急いで企画を立ち上げ，告知から当日までの間の感染状況の推移に気を配りながら実施していくという状況である。緊急事態宣言が発出されればその都度，中止や延期にもなる。ワークショップも本来であれば現地での交流が非常に大きな意味を持ち，それ自体がワークショップの大きな醍醐味であったが，人数を半分以下に減らし，直接的な交流を減らし，消毒を含め様々な対策をとりながら制限の中で進めている現状がある。

しかし，こうした困難な状況の合間をぬって，比較的状況が落ち着いた時期にワークショップを行なっているが，今回参画してくれたアートサポーターの方々は，普段の生活に様々な制約がある現在だからこそ，ワークショップでものづくりを思う存分に楽しんだり，言葉だけではない親子のコミュニケーションのきっかけを生み出そうとするなど，親子でわくわくしたり，気持ちがあたたかくなるような交流の時間を生み出すための活動を考えて実施してくれた。それは対面で行なったアートフェスはもちろん，オンラインの代替プログラムで実施したワークショップでも同様であり，画面越しではあっても隣り合った人とゆるやかに関わりを持つような時間を感じられるようなワークショップを工夫して実施した。

参加者からも「このようなイベントが少なくなるな

か子供たちのよろこぶ活動を開催していただきありがとうございました」「子供が夢中になって工作していました」といった声も寄せられた。こうした声を聞くと，やはり子どもたちが楽しんで参加できる活動が身近な地域に必要であることを実感する。その点では今回のアートサポーターとともに共同企画で開催したアートフェスの取り組みは，芸術文化活動が子どもたちにとって不可欠の活動であることに改めて気付かせてくれた。そしてこの困難な時代の中でも子どもたちが夢中になって楽しむことができる時間をなんとか創りだしていきたいと願っている大人たちのコラボレーションが，これからも子どもたちの芸術文化活動を地域で支える力となることをあらためて確認させてくれた。

新型コロナウィルスの感染が今後どのような展開を見せるのか，いつ収束するのかは全く見通すことができない。しかし，この間も子どもたちはもちろん，参画した大学生や保護者や市民が何かしらアートを通して交流できる機会を創っていければと思う。そのために必要な対策や新たな取り組みなども引き続き研究していきたい。

（笠原）

謝辞

本事業の取り組みに際しては国分寺市のご協力に御礼申し上げます。ワークショップでは各ブースにて実施補助や記録をご担当いただいた井口沙良さん他皆様に心より感謝申し上げます。本実践は公益財団法人日本生命財団・2020年度児童少年の健全育成実践的研究助成「アートを基盤にした共創的な居場所づくり－アートを中心にした多世代交流・文化共創型の居場所づくりのモデル化－」によるものです。

文献

佐藤一子・増山均（1995）『子どもの文化権と文化的参加－ファンタジー空間の創造』第一書林.

内閣府「平成27年度版　子供・若者白書」第1部 子供・若者の状況，第3節：子供の貧困，p. 30. https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h27honpen/pdf/b1_03_03.pdf （最終閲覧2021年8月12日）

吉澤俊（2020）「造形美術教育における専門職間連携協働の可能性～『チーム美術』の実現に向けて～」，『美術教育学研究』52，大学美術教育学会，pp.377-383.